

子どもへの合唱指導に関する一考察
—小学校におけるゲストティーチャーとしての経験
及び授業見学を基に—

平松 愛子 中島 美保

A Study on Chorus Teaching for Children
—Based on Experiences as a Guest Teacher
and Elementary School Tours—

Aiko Hiramatsu Miho Nakashima

Abstract

One of the authors (Hiramatsu) specializes in piano, and at this college she is in charge of instrumental performances in music subjects. At the beginning of this year (2018), when there was a request from a nearby nursery school for teaching chorus to children, she felt a big confusion about it. Because she had experience as an accompaniment pianist for many years in chorus, she thought she knew whatever the chorus is. However, she has always been a pianist. When she acts as a chorus teacher, not as an accompaniment pianist, she is not sure how she can guide the children. She was aware of the fact that she could not imagine it at all. Therefore, just after receiving this request, she visited several choral groups such as adult choirs, children's choirs, and elderly choirs and set up an opportunity to see how the various leaders actually teach. Furthermore, because another co-author (Nakashima), who specializes in teaching piano as well as Hiramatsu is continuing teaching chorus as a guest teacher at a neighboring elementary school, Hiramatsu observed how Nakashima teaching elementary school children. Both authors decided to cooperate and find what the good way to teach chorus to elementary students. Hiramatsu discussed based on what she has learned through the tours and Nakashima discussed based on what she has practiced so far in her teaching. Hiramatsu expects that the result of the study will be a useful teaching material for students who enrolled in a teacher training course and in the near future, it will help the students when they conduct music activities for children in early childhood education.

This paper reports the results of the collaborative research described above. There, as a desirable example, "Teachers sing with children and teachers themselves will demonstrate both good and bad examples of vocalization, singing way and expression.

In addition, this paper concretely talks how the teachers and children of elementary school are greatly influenced by teaching way of the guest teacher (Nakashima). Teachers and children of elementary school are greatly influenced by teaching guest teachers. Finally, this paper shows what is necessary for class in elementary school music department.

Key Words: chorus teaching, guest teacher, children's choirs,
elementary school children, singing with children

はじめに

筆者の一人（平松）は、本学においてピアノ、音楽表現（指導法）、音楽（器楽）、実技演奏（ハンドチャイム）を担当しており、音楽科目の中でも特に器楽系の科目を受け持っている。音楽表現の授業で手遊び歌の指導はおこなってきているものの、声楽の授業の経験はもとより、合唱指導の経験や大勢の児童たちを一斉に指導をした経験もない。今年のはじめ、近隣の保育園から園児たちへの定期的な合唱指導を担当するよう打診があったとき、大きな戸惑いを感じた。学生時代から20年以上も間、様々な合唱団で合唱ピアニストを務めてきたため、合唱とはどのようなものかは知っているつもりでいたが、歌い手が歌い易い弾き方や作品に応じた音色の奏で方など常にピアニスト目線で臨んでおり、合唱の指導者という立場で考えを巡らせたことがないことに気づいたからである。さらに、これまで学生への指導については、常に検討し続けてきたつもりであるが、自身が子どもに直に指導することは想定外であったことに気づいたからである。子どもに合唱を指導する場合、何をどう求め、どのタイミングでどんな言葉で伝えたらよいのであろうか。依頼を引き受けるか否かは別にして、藁をも掴む思いですぐさま、知人の伝手を頼りに児童合唱団や成人の合唱団、また高齢者の合唱団を訪ね、様々な指導者が実際に指導する様子を見学する機会を設けて頂いた。

他方、同じくピアノを専門とする著者の中島は、声楽家の重藤仁美氏と共に平成19年から地元の小学校でゲストティーチャー（以下「GT」と記す）として合唱指導をおこなってきている。平松はこの重藤氏と中島の小学校での合唱指導の様子を見学する機会を頂くことができた。このような事情の下、その授業見学の結果とこれまでに中島が実践してきた指導の振り返りを基に、筆者らは協力して児童への合唱の指導法について検討しようということになった。そして、この検討結果は、近い将来に児童との音楽活動をおこなう学生にも還元できるのではないかと考えた。以上が共同研究をおこなうに至った経緯である。

本稿は、小学校のG Tと保育者養成校の音楽担当教員の双方の立場から小学生への合唱指導について考察した結果を報告するものである。また、G Tが関わったことで出講先の小学校の教師や学校側の対応に見られた様々な変化についても触れ、さらに、小学校音楽科の授業の場に望まれることについても言及するものである。

I. 研究の概要

1) 研究の目的

本研究の目的は、児童への合唱指導の現状を明らかにした上で、問題点を探り考察し、その解決案を提示することである。また、児童への合唱指導において何が重要かを検討し、掲示することである。

2) 研究の対象及び出講先の小学校

筆者（中島）と声楽家の重藤仁美氏は、平成 19 年度に指導の依頼を受けて以来、A 小学校、B 小学校、C 小学校の 3 校に毎年連続して出講しており、今年度で 12 年目となる。また、今年度からはこの 3 校に加え、新たに隣町の D 小学校からの依頼も受けている。いずれも指導の回数は各校ともに毎年 1 クール 5 回程度、今年度（平成 30 年度）は、10 月に 3 回、11 月に 2 回であり、一回当たりの指導時間は 1 校時の 45 分である。クラス毎の指導や学年毎の一斉指導、また、全校児童一斉指導の場合があり、学校やその時々状況によって様々である。指導の対象となる児童数は各々の学校によって異なるが、今年度に指導をおこなった 4 校の内の 3 校について、人数を学年別の内訳とともに表 1 に示す。

表 1 平成 30 年度の小学校別指導人数

| 小学校 | 1 年生 | 2 年生 | 3 年生 | 4 年生 | 5 年生 | 6 年生 | 合計 | 備考 |
|-------|------|------|------|------|------|------|-------|-----|
| A 小学校 | — | — | — | — | 49 人 | 57 人 | 106 人 | 注 1 |
| B 小学校 | 5 人 | 11 人 | 16 人 | 10 人 | 12 人 | 4 人 | 58 人 | 注 2 |
| C 小学校 | 5 人 | 4 人 | 7 人 | 4 人 | 5 人 | 7 人 | 32 人 | 注 2 |

注 1:平成 29 年度以降は、音楽専科(非常勤)が在職している。注 2:音楽専科は在職せず。

B 小学校および C 小学校には音楽専科は在職していないが、A 小学校には昨年度より 1 名が非常勤講師として在職している。筆者（平松）が音楽の授業見学の機会を得たのは今年度より新規の出講先となった D 小学校であるが、この小学校に音楽専科は配置していない。

3) 研究の期間

振り返りの対象は、平成 19 年～29 年の 11 年間であり、いずれも 10 月～11 月の指導期間である。また、指導の様子を見学（D 小学校）した時期は、今年（平成 30 年）の 10 月～11 月の中の 2 日間である。

4) 研究の方法

11 年間にわたっておこなってきた小学校 3 校（表 1）における児童への合唱指導の方法を振り返る。その振り返りと共に、児童や教師の様子、そしてそれぞれに見られた変化

に着目しながら、見学した結果も合わせて、検討をおこなうこととした。

II 指導内容及び指導の方法と指導による児童の変化

1) 指導内容

依頼された指導内容はどの学校もほぼ同じである。合唱曲2曲の歌唱指導及び児童が伴奏を弾く場合のピアノ伴奏指導、器楽合奏の指導であり、各校ごとに開催する音楽発表会と町内全小学校が毎年合同で開催する音楽会に向けての指導である。本稿では、ピアノ伴奏指導と合奏指導は除くものとし、以下に示す合唱指導についてのみ触れることとする。

合唱指導の内容：①学年に応じた発声法

(低学年は地声での美しい発声、高学年は頭声発声)

②正しい音程で歌う方法

③ハーモニーの美しさと響きの大切さに気づき表情豊かに歌う方法

11年間に指導した合唱曲の曲名を表-2に示す。

表-2 11年間に指導をおこなった合唱曲一覧(小学校別)

| A 小学校 | | | | | |
|-------|------------------|----|-------------|----|-----------------------|
| 1 | この星に生まれて | 6 | 流れゆく雲を見つめて | 11 | 地球星歌 |
| 2 | サヨナラのかわりに | 7 | にゃあごろソング | 12 | 栄光の架橋 |
| 3 | 生きてるってすばらしい | 8 | 怪獣のバラード | 13 | Let's search Tomorrow |
| 4 | 翼をください | 9 | 明日へ | 14 | Smile Again |
| 5 | 道 | 10 | 乾杯 | | |
| B 小学校 | | | | | |
| 1 | LET'S GO!いいことあるさ | 6 | 名もない花のように | 11 | つばさをください |
| 2 | 麦の唄 | 7 | Smile Again | 12 | 秋のメドレー |
| 3 | 明日という大空 | 8 | 世界の子供のマーチ | 13 | とびだせロケット |
| 4 | 気球に乗ってどこまでも | 9 | Believe | 14 | 夢の世界を |
| 5 | YELL | 10 | Smile | | |
| C 小学校 | | | | | |
| 1 | 手のひらを太陽に | 7 | 勇気ひとつを友にして | 13 | あおいそらにえをかこう |
| 2 | Message | 8 | 翼を広げて | 14 | U&I |
| 3 | 見えないおくりもの | 9 | 大空賛歌 | 15 | あすという日が |
| 4 | この星のどこかで | 10 | まっかな秋 | | |
| 5 | ともだち | 11 | 大空がむかえる朝 | | |
| 6 | ハイホー | 12 | さようなら | | |

2) 指導を受ける前の児童の様子

毎年の第一回目の指導の際には、当該3校の児童に共通して以下のような様子が見られ

ページ番号を入力しない

ていた。ちなみに、この3校間に児童の音楽的な能力に差異はないとの印象であった。

- ①音程やリズムが不安定で読譜力も乏しいため、楽譜を見て歌うことが出来ていない児童もいる。
- ②適切な発声法で歌えていないため響く声で歌えず、変声期の男子児童の中には、喉が痛そうな歌い方をしている児童もいる。
- ③強弱など抑揚を付けておらず、表現力が乏しい。一人一人の歌がバラバラでまとまりがなく、ハーモニーを感じて歌えていない児童も見受けられる。
- ④歌詞の意味を理解して歌っている様子が覗えない児童もいる。
- ⑤楽しそうに歌っているように見えず、やる気が感じられない児童もいる。

3) 児童に足りていない力

第一回目の指導をおこなった際に児童に足りていない力として毎年3校に共通して以下の点が観察されていた。

- ①歌への興味、関心。
- ②正しい音程を聞き分けることのできる耳。
- ③曲に対する表現力（歌詞、ディナミック、フレーズ、リズム感）。
- ④皆で歌うことの楽しさ、素晴らしさを感じる心。

4) 指導の方法

GTとしてこれまで実践してきた指導の具体的な内容を以下に列挙する。

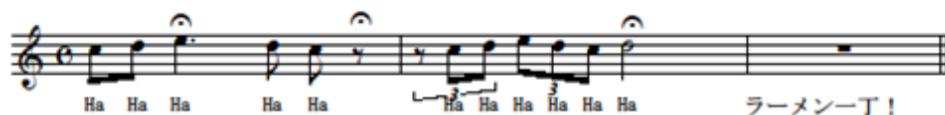
①発声法（頭声発声）

4年生～6年生の特に女子には、高音域は頭声発声で歌うよう指導した。面白いフレーズを用いて、笑いながら楽しく高音域を自然に出させるようにと工夫した。

♪石焼きいも



♪チャルメラ



また、頭声発声で歌うために次の3点を意識させ、これを指導のポイントとした。

- 1.自分の声を前に出すのではなく、頭の上に声を出すイメージを持たせること。
- 2.自分の上下左右、前後部含めて、周囲360度で響きを感じることに。
- 3.自分の身体全体がひとつの楽器になっているイメージを持ち、身体を響かせること。

②正しい音程で歌うための音取りの方法

音程は CD 音源を聴いて覚えるのではなく、始めに譜面の音符を階名で読ませ、次にその部分を弾くピアノを聴き、ピアノと一緒に正確な音程で繰り返し歌う方法を使った。

③表現力向上の方法

音程は敢えて付けず歌詞のみを朗読させ、言葉の意味や、歌詞から読み取れる背景や心境、どのような場面か（楽しい、悲しい、辛い、喜び、大きな世界、小さな暗闇など）を想像させ、曲に対するイメージを膨らませる方法を使った。

様々な場면을想像することで自然とディナミックがつくようになり、詞の世界を自分なりに表現したいという気持ちが芽生え、歌うことへの喜びに繋がるものと考えた。

5) 指導を受けた後の児童に見られた変化

G Tの指導を受けた後の児童に見られた具体的な様子を以下に列挙する。

- ①歌、合唱に対して興味を持つようになり、歌うことを楽しめるようになった。
- ②正しい発声で歌えていることを自覚するようになり、自分が響きのある声で歌えていることへの喜びを感じるようになった。
- ③曲に対する思い入れが増し、曲に親しみを感じるようになった。
- ④児童の顔は表情が明るく変わり、意欲的に楽しそうに歌うようになった。

Ⅲ. 長期期間の指導で見えてきた児童や教師の変化

11年という長期間にわたる指導の中で見えてきた児童や教師の変化について列挙する。

1) 指導をはじめた当初（平成19年～21年頃）に見られた状態

①児童の様子

- 1.発声の基礎は全く指導がなされておらず、音程、リズムも不正確な状態であった。
- 2.児童たちの、「歌わされている感」、「仕方なく歌っている感」が伝わってきていた。
- 3.人前で歌うことに対する極度の緊張、恥ずかしさ、自信のなさが顕著であった。

充実した合唱指導を目指していたものの、児童の基礎的な音楽への力が不足しており、自信も経験も意欲も無く、様々な面で力が不足している状態であった。

②教師の様子

日本の小学校では、猛烈に多忙のため教師には時間的にも体力的にも、また気持ちの上でも「ゆとり」が全く無いと云われて久しい。このことは筆者らも十分に承知している心算である。そのような厳しい環境下での合唱指導で見られた教師の様子を率直に書くことにした。この記述内容が今後の改善策を検討する際に役立つことを期待したからである。

- 1.教師がG Tに丸投げしている印象が稀にあった。レッスンする歌を第1回目の指導日までに一度も児童に歌わせていないこともしばしば見受けられた。
- 2.児童に楽譜を渡さず歌詞カードのみを配布し、CDの音源を流し、耳だけで曲を覚え

させていることもあった。

3.音楽や合唱への関心が少なく、G Tへ信頼度が低いのではないかと思わされる場面が何度かあった。

2) 近年（平成 27 年～29 年頃）に見られるようになった変化

指導を始めた平成 19 年頃と比べ近年にはどのような変化が見られたかを以下に列挙する。

①児童に見られる変化

- 1.G Tに対して親しみをもち、来校を楽しみにしてくれるようになった。
- 2.G Tの歌声を目標にして発声法に気を配りながら歌うようになった。
- 3.人前で歌うことへの緊張や恥ずかしさ、自信のなさ等が年を追うごとに減少してきた。
- 4.歌うことの楽しさ、皆で歌うことの喜びを感じている様子が伝わってくるようになり、音楽発表会という目標に向かって曲を仕上げ、他の小学校に負けたくないという競争心が芽生えてきた。
- 5.全体として技術的に合唱が上達しただけではなく、児童が取り組む姿勢も大きく変わり、年々合唱へのモチベーションが上がってきていた。

②教師に見られる変化

- 1.早くから準備をするようになった。合唱曲としては難しい今どき風のニューミュージックを選曲しなくなり、選曲も事前に相談してくるようになった。
2. 毎年、第 1 回目の指導までに、合唱になるように歌わせてくるようになった。
- 3.G Tが指導する際には、その指導法を専任教員が熱心にメモを取るようになり、わからないことや問題点、迷ったことなどを質問してくるようになった。日頃からG Tと同じ手法で歌わせようと取り組む教師がでてきた。
- 4.G Tに対する信頼が生まれてきた。

G Tの来校に、教師も毎年のことで慣れてきており、双方に絆が生まれ、その結果、教師の取り組み方に大きな変化が見られるようになった。

③学校毎に見られた変化の特徴

- 1.全学年を指導している学校（B校・C校）については、児童は6年間にわたって毎年同じ時期に同じG Tの指導を受けきたことで「前の年から成長した自分達の歌を聴いて欲しい」と、学年が上がるに連れて「やる気」も上がってくる様子が窺えた。それゆえに、彼らの歌唱力の水準も年を重ねる毎に向上してきていた。
- 2.高学年のみを指導している学校（A校）については、当該児童は低学年の頃から高学年の歌声を聴きながら育ってきている。いつかは僕たちも5、6年生のお兄ちゃんお姉ちゃんたちが歌うような格好良い曲を、あんな素敵な声で歌えるようになりたい…と憧れを抱いてきた様子を窺うことができた。

年を追うごとに児童にも教師にもG Tの来校を楽しみにしている様子が随所に感じら

れようになってきた。町の小学校が一堂に集う合同音楽発表会は他校への披露の場でもあり、そのためか、児童だけでなく教師にも完成度を高めようと熱心に取り組もうとする熱意が感じられるようになった。双方の相乗効果により児童の歌声や表情等の全てがそれまでと比べて大変良くなってきた。その上に、良くなったことへの喜びと児童が持つ無限の才能が児童自身にも教師にも感じられるようになった。

3) 児童を取り巻く環境が生み出す好循環

指導によって生み出された児童を取り巻く環境の変化について、経過ステップを矢印(→)で繋ぎながら示す。

①指導者は決して叱らない、大きい声を出しなさいとは言わない、消極的な児童には良い部分を褒める、1人1人の顔の表情を見て視線を逸らさない。→②もっと上手になりたいと、やる気が出てくる。→③教師達は上達した歌声を聴いて、児童を褒める。→④さらにやる気が出てくる。→⑤上手くなったことで自信がつく。→⑥歌う事への喜びを感じるようになり、歌う際の顔の表情が良くなる。→⑦さらに上達する。→⑧本番ステージでの羞恥心、自信の無さが徐々に消え、緊張を最小限に押さえて歌えるようになる。→⑨音響効果の高い音楽会用の広いホールで、自分達の合唱の美しく迫力ある歌声に自ら感動する。→⑩我が子の合唱を聴きに来た保護者からも褒められる。→⑪また来年もこの舞台上で歌いたい。→⑫来年はもっと上手になった歌声を聴かせて、また褒めてもらいたいから1曲1曲を正確な音程、正確なリズムで、正しい発声で心込めて歌おう、また頑張ろう。

以上の経過を辿って、好ましい結果に到達したものと推測される。

IV. 問題点と改善案

11年間の指導を振り返り、問題点とその改善案や望ましい実践内容を以下に記す。

1) 指導する上で難しいと感じること

①正しい音程で歌うことが困難な児童は、短期間の指導で改善させることは難しい。

いつの日か音の違いに気づき、自ら治したいと思うまで待つことも大切であろう。児童本人が気付いていない場合は、「〇〇君の声は大きくて元気があってよい声だけど、もう少し小さな声で歌うときれいな声で歌えるよ」と本人を傷つけぬよう配慮しながら言葉を掛ける。本人が気付いている場合には、「大丈夫、皆の声をよ〜く聞きながら歌ったら良くなるよ」とその児童の横で、彼にしか聞こえない声で伝えるなどして、当人の歌い方を決して否定しない。

②変声期の男子児童に対する発声法の指導は難しい。

声変わりの様相も児童それぞれで違うことから、無理を強いるような発声はさせない。

上記のように指導を難しくしている要因は、指導回数が限られ、時間にゆとりがないことに加え、児童個人の資質や、成長期特有の過程に因るものが大きいと考えられる。

2) 児童への指導を難しくさせている状況

児童への指導を難しくさせている背景には教師や学校側の意識の差が大きいことにあるものと考えられる。以下に3例を挙げる。

1. 「児童にやる気がない＝教師にやる気がない」という場合が多々ある。多忙を極める仕事に追われ小学校の教師が音楽に関心を持ってない場合があり、音楽への向上心が高くないと感じられる学校や学級の児童には、指導が難しい。教師間におけるモチベーションの差や、設定目標に対する温度差がある場合は、発表会に向けての準備を順調に進めることは難しく、その事態を改善させるためには、教師だけではなく学校全体が一丸となって共通の目標に向かって取り組むことが必要であるとする。
2. 学校や学級自体が荒れている場合は、指導が難しい。
3. 指導により培った発声法や歌う技術など、児童の音楽力がリセットされる場合がある。

公立小学校では定期的に教師が異動する制度があるため、昨年携わった教師が今年度在職しているとは限らない。異動がなくとも他学年への配置換えによってG Tの授業に接しなくなる場合もある。過年度の授業内容やG Tによる指導方法等の継続が難しい状況にあるため、近年ではそのような場合であっても、過年度の資料や報告書などを各学校独自で作成し、次年度に向けての申し送りをするようになった学校もある。

V. ゲストティーチャー（伴奏ピアニスト）の目線から見えた教育的効果

G T（中島）の主な役割は、本来、歌唱指導を担当するG Tへのピアノ伴奏とサポート、そしてピアノ伴奏を担当する児童への伴奏指導である。しかし実際には、歌唱指導のG Tと一緒に歌の指導にあたるのが常であった。ピアノ専門である中島は、声楽専門のG Tに比べ発声や歌唱力が当然のことながら劣るが、それを児童に率直に伝え、中島が児童の前で正しい発声を心掛けつつ音程に注意し、心込めて歌う姿を見せ続けてきた。これは「専門に勉強していなくても、しっかり歌は歌えるんだ」と児童に関心を抱かせ、これを切掛けに児童たちが自信を持って歌えるようになることに繋がった。

一方で、児童の弾くピアノ伴奏がおぼつかない場合には、中島が代わりに弾いて手本を見せることもあった。これによって伴奏を担う児童が、弾き方の違いで歌い手が歌い易くなることや、歌い手がより感情込めて歌えるようになることなど、合唱が良い方向に変わっていくことを実感できたことが分かる場面もあった。手本を見せて、合唱の変化を実感することにより、児童は自身の弾く伴奏に対してその役割の大きさに気付くのである。伴奏者に選ばれた児童は、他の児童が合唱に取り組む随分前からピアノ伴奏の練習に自宅で行き届くようになり、良い伴奏を弾けるようになりたいとの思いで、他の児童が遊んでいる間もコツコツと練習を重ねていた。他方、歌い手である他の児童に対して、伴奏者が努力を続けたからこそ、皆が安心して歌えるのだということを説明すると、「自分たちもも

っと努力しなければいけない」という思いを強く嘯みしめている様子を見せるようになってきた。

ピアノ伴奏の指導担当者として歌唱指導担当者とは違う観点での注意事項を伝えることは、それ相応の効果があつたものと自負している。例えば、姿勢・口の開け方・目線・人を気にせず歌とともに心を伝える・音楽発表会までのモチベーションの維持・本番での緊張の取り除き方・学校全体（学年全体）の目標への意識、一体感、協調性・達成感などが大切であると伝えたことである。

VI. 小学校の音楽の授業に望むこと

小学校音楽の授業を進める上で、教師に求めたいことを以下に列挙する。

- 1) 児童の音楽力は、指導する教師の音楽性や音楽に対する姿勢から大きく影響を受ける。
このため、教師は、日頃から勉強して常に感性を磨いておくことが望ましい。
- 2) 児童の理解力には個人差があるが、音楽は答えが1つではない。上手いか下手か、歌えたか歌えてないかというような一面だけを評価するのではなく、前回よりどれだけ前向きに歌えたかという観点から児童の成長を見守ることが望ましい。
- 3) ただ大きな声を出させるのではなく、響かせる綺麗な声を出すように心がけることを伝え、児童の気持ちに「歌いたい」「歌が好きだ」という方向に向くような楽しい授業になるよう工夫することが望ましい。
- 4) 教師も児童と一緒に歌い、多様な感情を共有するように努力することが望ましい。選曲に際しては、唱歌や教科書掲載曲を学ばせた上で、児童が親しみや興味を持っているアニメの曲などにも触れて頂きたい。そのような曲を指導する際にも勿論、歌詞の意味や情景を考えながら歌うよう促すことが望ましい。
- 5) 集中力に関して言えば、45分の授業の中で教師がただ歌わせる、CDを流すだけでは無く、時には身体を動かし時には演劇のような演出も取り入れ、児童を飽きさせず自由に心も体も動かせる授業をおこなうことが望ましい。特に低学年では、集中力を持続させることに目を向けて指導することが求められる。そのためにも、身体を動かす身体反応や表現あそびを取り入れるなど、集中力が持続できるように工夫することが望ましい。

VII. まとめ

前述までの内容を踏まえ、あらためて児童に身に付けさせたい能力を以下に列挙する。

- 1) 読譜力: 音階があることを理解させ、階名で歌うことのできる読譜力を備えさせたい。
- 2) 正しい発声法: きれいな声が出せるようになれば、表現の幅も広がり、自身の歌い方の良し悪しを判断できるようにもなり、さらなる上達が期待できよう。指導要領には、

教師は範唱で指導する旨の記載があるが、授業見学の結果、範唱をおこなっていない場合も見受けられた。範唱の重要性を認識はしているが、教師の資質・能力に照らし合わせたときに実行し難い場合があり、これには学校としての解決策が望まれる。

- 3)音を捉える耳：正しい音程と自分の声を客観的に聴くことのできる能力は、歌唱活動の基本であると考え。低学年時から音楽遊びを繰り返し、遊びを楽しみながら音程の感覚を身に付けさせるとよいと考える。
- 4)気持ちのゆとり：他者の声や伴奏を聴くことのできる余裕を持つことは大切である。そのために教師は、児童の歌声を否定することのないよう言葉がけに気を配り、自信を持って伸び伸びと歌うことが出来る環境作りにも気を配る必要がある。
- 5)歌詞への理解：「歌詞の音読」は歌詞を理解し、詞の世界を表現するための想像力を養う上で極めて有効な方法であると考え。
- 6)表現力：曲のフレーズ感や詞の世界を感じ取り、それを自分なりに表現しようとする意欲と表現するための歌う技術が必要であろう。
- 7)協調性：それぞれの力を出し合って一つの曲に仕上げる向上心を持つことや、一つの目標に向かって突き進む団結力は、合唱のように集団で音楽活動をおこなう者たちにとっては必須事項である。

児童への合唱指導で大切だと考えていることを以下に列挙して本稿のまとめとする。

- 1)低学年の段階から、教科書（楽譜）を使って指導をし、読譜力やリズム感、音楽用語など、音楽の基礎力が少しずつ身に付くよう工夫する。その際、時に音楽あそびなども取り入れ、楽しみながら学ばせることを念頭におく。
- 2)低学年の児童に散見される「ただ大きな声で歌う」ことはさせず、音程があることを理解させ、同時に発声法の指導も取り入れる。
- 3) CD 音源から音を拾うのではなく、教師が弾くピアノ等の楽器による生の音を聴きながら、丁寧に階名で歌うことを反復する。
- 4)教師が範唱し、発声や歌い方、表現方法に関して、良い例と悪い例を実演して見せ、その後児童と一緒に歌う。変声期の男子には、無理に大きな声を出させず、1オクターブ下げて、軽く歌わせる。
- 5)正しい音程で歌うことが困難な児童には、決して叱ったり否定的な言葉をかけたりしない。言葉がけの内容には気を配る。
- 6)歌詞を音読させ、歌詞の内容、詞の世界を心で捉え理解させるよう努める。明るく楽しい詞の場合は笑顔で声も明るく、暗く悲しい場合は悲しい表情で哀しげな声で…という様に、一人ひとりが心と表情、声色を素直に表現することで、皆の歌声が曲想に相応しいものとなって、まとまった美しい響きとなり、それが聴き手に自然に伝わっていくことを理解させる。

7) 答えが一つではない、それが「音楽」の良いところであることを伝え、皆と同じでなく、良いこと、一人ひとりがもっと自由に自分を表現してよいことを伝える。歌うことへの楽しさや喜びを見出させるため、叱ることや否定的な言葉は使わず、良いところを褒める。

なお、幼児教育の現場における幼児の歌う活動と、保育者の音楽指導法を児童の音楽活動や小学校音楽科への授業へと滞りなく繋げるためには、幼児に大きい声だけを望まず、音階（音の階段）、リズムなどの音楽の基礎を教えることも重要であろう。音楽そのものを美しいと思う心と、曲想や歌詞から想像を広げ、想像した世界を自分なりに表現したいと思う意欲を育てることこそが最も重要であると考えます。

おわりに

指導した児童が卒業した後、中学校の合唱コンクールの舞台上で歌っている声を聞く機会があった。彼らの素晴らしい合唱、美しいハーモニーを再び聴くことができ、音楽的な面も含め彼らの様々な成長を感じることができた。彼らには小学校時代に培った発声法等の基礎力が身に付いており、人前で披露することへの羞恥心も克服できているため、心地よい緊張感を持って歌う姿、高い目標に向かって努力してきた姿を見ることができた。遠くからではあるが、こうして彼らの成長を見守り続けられるのもGTの醍醐味であろう。

本研究で得られた結果を学生に還元させるところまでの記述は叶わなかった。これは次回の課題とし、今後も研究を継続していく所存である。また、本研究はGTと保育者養成校の教員の目線のみから考察・検討をおこなったものであったが、今後は小学校の現職教師からも音楽指導についての生の声を集め、さらに研究を深めていきたいと考えている。

謝辞

本研究にご協力頂きました小学校の関係者の方々、並びに声楽家の重藤仁美氏に心より感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 「小学校学習指導要領」文部科学省 平成29年3月
- 2) 渡会純一（東北福祉大学）「外部講師としての指導のあり方ー小学校特別クラブ音楽部における指導実践よりー」
- 3) 日吉武（鹿児島大学）「音楽科教師に求められる力についての考察ー中学校音楽科を中心に」
- 4) 戸谷登貴子（東京学芸大学大学院連合学校教育学研究所博士課程）「音楽科における合唱授業の再構築ー指導者と研究者のためのワークショップからの提言」
- 5) 伊藤誠（埼玉大学）「音楽教師に求められる実践的指導力ー教員養成の充実と改善に向けてー」